

令和元年6月7日現在

機関番号：14401

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2016～2018

課題番号：16K17421

研究課題名(和文) 日系ブラジル人の地位達成に関するネットワークと動員資源に関する研究

研究課題名(英文) Study on the network and mobilize resources for status attainment of NIKKEY Brazilians

研究代表者

山本 晃輔 (YAMAMOTO, KOUSUKE)

大阪大学・人間科学研究科・招へい研究員

研究者番号：30710222

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、グローバリゼーションを背景として国際移動を行う日系ブラジル人のトランスナショナルなネットワークと「地位達成」を検討することにある。平成28年度から平成30年度を通じて、毎年1回の訪問調査を実施した。サンパウロ州及び、パラナ州において、4世代3家族32名にインタビューを実施した。過去の日本移民が、都市部に移動することで「地位達成」を行ってきた。一方で現在の移民は、日本とブラジル間を移動することによっても「地位達成」を果たしている。そして、移民が世代を重ねるほど、そして末弟であるほど「地位達成」は高くなる傾向が見られた。またそのネットワークは、世界的な広まりをもつことが見出された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究では(1)国際移動が必ずしも移民のリスクを高めるだけではないということ、(2)過去のブラジル日本移民研究の知見の今日的な側面を明らかにした。本研究での知見は、2018年9月に開催された教育社会学会(70回大会)において「日系ブラジル人のデカセギはなぜ続くのか - 世代間生活史の分析から - 」と題して発表を行った。また、研究の一部を、『移民から教育と社会を考える - 子どもたちをとりまくグローバル時代の課題』(2019年刊行)において分担執筆という形で発表した。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study is to clarify the Japanese Brazilian transnational network for the international movement to "status attainment". This survey conducted three Brazilian surveys every year. Then, in Sao Paulo State and Parana State, we interviewed 32 people of 4 generations and 3 families. Past Japanese immigrants, has made the "status attainment" by moving to urban areas. On the other hand, current immigrants have achieved their status by moving between Japan and Brazil. In addition, as the generation of immigrants increased, and the younger brother had the tendency to achieve "status attainment". The network was also found to have a worldwide spread.

研究分野：教育社会学

キーワード：ブラジル日本移民 日系ブラジル人 グローバリゼーション

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

我が国において外国人教育は、今後の人口減や外国人住民の増加に関連して大きな課題になることが予想されている。そのため、国内研究は概ね「日本における外国人をどうするか」という課題意識が中心である。しかしながら、移民である以上、人々は「国際移動」を伴いながら生活をするケースもある。過去、国際移動は「地位達成」「教育達成」に関してグローバルリーダーにとっては有益でも、労働者層にとってはリスクであると語られていた。ところが、ブラジルに渡った日本移民は過去、移民を通じての「地位達成」「教育達成」を果たしている。そしていまなおその移動は継続的に行われている。

2. 研究の目的

本研究の目的は、グローバル化を背景として国際移動を行う日系ブラジル人のトランスナショナルなネットワーク資源を検討することにある。そして、日系ブラジル人が、ネットワーク資源を活用することでいかなる地位達成を遂げてきたのか・遂げようとするのかを明らかにする。その際、世代間生活史を収集・分析することを通じて、世代ごとのネットワークの特質やその利用方法の違いに迫りたい。そして、我が国の「外国人と教育」研究が、外国人を画一的に捉え世代ごとの違いに充分関心を払ってこなかったことを批判するとともに、「国際移動と教育」における新局面（ICT を利用したトランスナショナルなネットワーク）の動向を明らかにする。

3. 研究の方法

本研究は、日系ブラジル人の世代間生活史の収集・分析を行う。具体的には、旧来行われてきた生活史研究を 世代間に拡大するとともに これまであまり対象とならなかった教育に関する地位達成や階層移動に焦点を当て 国際移動や技術インフラ（ICT）といった現代的な移民の特徴についても留意する。3 年間の研究期間で、3 世代、3 家庭の生活史を収集した。

4. 研究成果

本研究を通じて、過去の日本移民が、都市部に移動することで「地位達成」を行ってきたことがわかった。一方で現在の移民は、日本とブラジル間を移動することによっても「地位達成」を果たしている。そして、移民が世代を重ねるほど、そして末弟であるほど「地位達成」は高くなる傾向が見られた。またそのネットワークは、世界的な広まりをもつことが見出された(図 1)。

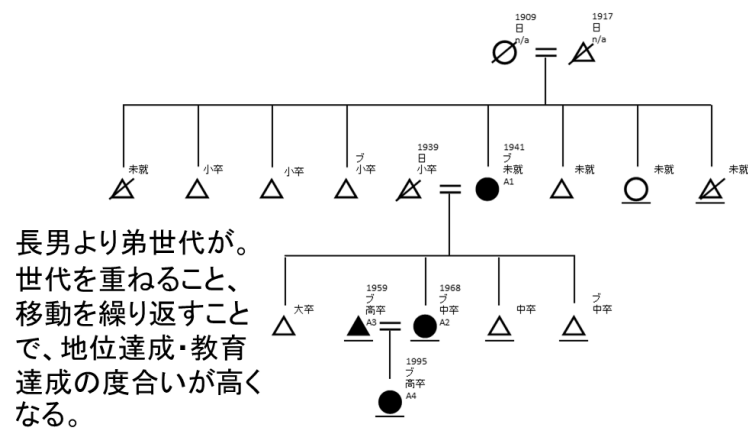


図1 日本移民の3世代インタビュー

塗りつぶしが調査対象者。 が女性。 が男性。下線がデカセギ経験者。二重下線は日本在住。斜線は故人。塗りつぶし者右上は出生年、出生地(日=日本、ブ=ブラジル)、最終学歴、整理番号。

本研究では(1)国際移動が必ずしも移民のリスクを高めるだけではないということ、(2)過去のブラジル日本移民研究の知見の今日的な側面を明らかにした。

調査を通じて、日本からブラジルへ渡った移民1世の出稼ぎ、そしてブラジルから日本へ渡った移民2世のデカセギは、経済的要因によるものとして語られていた。しかし、移民3世のブラジルでの生活、日系人の日本への再移動の背景には、経済的な要因だけでは還元できない様々な要素がみられた。今回の調査データを概観すると、土地を購入した入植世代は、デカセ

ギ世代に土地・家業を継承しているが、家族全員に分割するというよりも、同居家族に継承していることがわかる。前山（1997）がいうように、移民1世から移民2世にかけては家族の長男・長女が家内労働に従事し、弟・妹が大学に通うといった様子が伺える。実際、3家庭ともに、末子になるほど、そして世代を経るごとに学歴が向上していることが伺える。把握している限り、大学に進学したデカセギ世代は、農村部から都市圏へ生活拠点を移しており、土地や生業を継承した子どもたちが土地を守るといった構図が浮かび上がる。日本移民は土地をもたぬ「非相続者」であったが、土地を「相続」することを経て、自らの「ホーム」を確立していたのである。

デカセギを押し進める要因

（1）生業の継承と就労困難

移住世代は農業を起点としつつも、その後離農した家族は、市街地で自営業者となっている。営農家族は、今日に至るまで農業を続けているが、ブラジルでの営農は高いリスクを孕んでいる。第2次世界大戦をはさみ、農業での成功を収めつつあったものの、70年代以降のブラジルの景気後退の影響により経営が厳しくなっていた。そのうえ、日系産業組合・日系銀行の倒産がこれに追い打ちをかけたことで、運転資金獲得のためにデカセギせざるを得なかった。そして現在は家内での農業だけでなく、土地を大規模農家に貸し出すことで収入を得ている。個人農家が収益を上げるにはグローバル資本との厳しい競争を勝ち抜く必要があり状況は厳しい。

3家ともに、家業継承者がデカセギを行い、日本からの送金で不景気時の家業を支えていた。3家のデカセギ世代は、かれらの兄弟や子ども世代に比べれば学歴が低く、帰国後のブラジルでの就労にあっては「家業を継ぐ」ほか選択肢がなかった。そして家業の継承が、経済的な不安定さを生じさせていた。

（2）文化的資源の継承

移住世代は全員日本語が第1言語であり、特に農地においては日本語だけで生活することも可能だった。デカセギ世代以降は母語がポルトガル語であっても祖父母、親や日本語学校で日本語を学んでいる。とりわけ農村部や都市近郊部には小規模な日本語学校が設立されており、家業を継承した場合、家庭内言語は日本語であった。そのため、デカセギにあたっての言語上の障壁が低くなっていた。また日本生まれの子ども世代は、もとより日本での生活を希望していることもあり、積極的に日本語・日本文化に親しんでいる。

また、移住世代の多くは日系団体を通じて演芸やスポーツに親しんでいた。日本の書籍やレコード、映画に親しむことで日本との繋がりを保持していた。デカセギ世代も、「雑誌で見た芸能人を日本でみる」ように、親の「日本趣味」に触れていた。子ども世代に至っては、祖母とともにNHKの相撲放送をみることや、Twitterを通じて日本人と交流を重ねるなど、インターネットを通じて日本と「時差なく」日本文化を受容している。移住世代が日本人として日本文化を愛好する一方で、デカセギ世代は「日系人」として日本文化に「触れて」おり、子ども世代は「日本人」とおなじように、日本文化を愛好している。各世代が日本語に触れていたことはもちろんだが、文化趣味の隔世遺伝のような状況がみられた。その背景には第2次世界大戦時の日本文化の排斥運動の影響から、2世の多くがブラジル学校・ブラジル社会に参入していたことで生じた文化の断絶を、デカセギが日本社会と繋ぎ直したとみることもできるだろう。

デカセギを押し止める要因

（1）親の高齢化

ここまで、デカセギを押し進める要因について検討してきた。上述してきたように、将来の選択肢としてデカセギを視野に入れながらも、かれらは日本への渡航に慎重である。その第一義的な理由は、移住世代の高齢化である。移住世代から「土地」と「仕事」を継承している場合、仮に仕事が不安定であってもおいそれと日本に永住することは難しくなる。こうした家族の体調や健康への配慮だけでなく「親から継いだ日本語や仕事を大事にしたい」「親族にとっても大切な場所」といった語りもみられた。家業を廃業することや土地の売却は「不便だとはわかっていても簡単にはできない」ことであり、実家を失うことになる。「相続者」となった日系人にとって、家族が所有してきた土地は「ホーム」である。経済的な観点からブラジルに住むか、日本に住むかといった大きな枠組みだけでなく、親族にとっての「ホーム」を守る必要があることも、デカセギを押し止めていた。

（2）工場労働への忌避感

子ども世代は、日本で親世代が昼夜問わず工場働いている姿をみていた。そのため、工場労働への忌避感は強く、「工場で働くなら農業でいい」と語られている。したがって「友人からデカセギに行こうと誘われた」としても、親のように働きたくないと考えられている。こうした工場労働への忌避感は、親のデカセギを身近で見てきただけでなく、日本における職業威信の影響もあり「工場で働くのは負け組感がある」といった語りもあった。「アルバイトなら良い」や「いまなら仕事を選べる」といった発言が見られるように、日本の生活状況や就労環境について子ども世代は情報収集している姿が垣間見られた。

(3) 教育達成の課題

また3家ともに共通して聞かれたのは、日本でいくら生活を成り立たせても、子どもに大学に進学させることは難しかったのではないかという語りである。そして、ポルトガル語を話さないにしても、ブラジルの柔軟な教育制度を援用するほうが大学進学しやすいと語られている。

子どもたちにとってブラジルでの大学進学がその後のライフコースを水路付け、ブラジルへの定住を促進するといった研究もあるが、本研究では大学に進学したことでブラジルでの定住を念頭に将来を展望する一方で、日本への渡航を希望している事例では大学進学が無駄であると語られる。生活状況に応じて物語は組み替えられていくが、結婚や就職を経て、大学進学者の再デカセギといった状況も今後はみられるのかもしれない。

世代を超えたグローバルなバイパスの存在

以上のように生活史を整理したとき、(1)日本移民は旧来より生活上のリスクが存在していた。例えばブラジルで営農を続けるためには、グローバル資本との厳しい競争を勝ち抜く必要がある。商店を営営するにもインフラが整った今日、多種多様な業種との競争に晒される。逆説的ではあるが、かれらが土地や家業の「相続者」であるがゆえに、当地を守るために、「デカセギ」をしてでも「ホーム」を守るといった論理が生まれていた。(2)とはいえ、日本に渡ったところで選べる仕事は限られている。デカセギするにしても、ブラジルで永住するにしても、自身と家族が身を投じる事になるリスクを勘案したうえで、今日のデカセギが計画されていたことが理解できる。(3)また、日本人移住地という歴史的背景から、日本文化や日本語に親しみ深いことも、デカセギのしやすさに繋がっている。そして(4)インターネットを通じた情報の大量流入によって、子ども世代は日本の情報を常時キャッチアップしており、日本への渡航が常に将来の選び得る選択肢となっている。(5)ただし、大学進学してほしいという親の期待は高く、子ども世代のデカセギを一部押し止める効果を有している。(6)親の期待がいくら高いとしても、親自身も場合によっては「デカセギ」することもあるし、子どもたちも大学を卒業したとしても「デカセギ」するかもしれないと語る。

このようにまとめたとき、日本移民・日系ブラジル人のなかには、移住世代より定住を前提とするメインパス(教育を通じた地位達成)を利用しての地位達成が難しい家族が存在していたことがわかる。デカセギ世代においては、移住世代の家内労働を手伝うために「長男・長女」が。子ども世代においては、デカセギ世代の日本における就労に伴い日本とブラジルで就学することになった。

しかしながら、日本からブラジルに渡った日本移民は、学歴を有しておらず、日本での生活に困難を抱えていた人々であった。また、デカセギ世代にしても、ブラジルでの生活が成り立たず、デカセギしなければ生活を成り立たせることが難しかった。そこで、かれらが利用したのは、グローバルなバイパス(出稼ぎ・デカセギ)である。

世代を超えたバイパス活用は遠回りであっても、移住世代、デカセギ世代、子ども世代を通じて緩やかなスケールで地位向上が進行していることも把握できる。メインパスだけではないバイパスの存在は、ブラジル日本移民の生活に存在し続けてきた。それとともに、日本とブラジルの社会空間を連続したものとしてきた。短期的に見れば、デカセギはリスクの高さが語られがちであるが、トランスマイグラントとして移動可能性は、家族のセーフティネットとなり続けてきたのである。

本研究での知見は、2018年9月に開催された教育社会学会(70回大会)において「日系ブラジル人のデカセギはなぜ続くのか - 世代間生活史の分析から - 」と題して発表を行った。また、研究の一部を、『移民から教育と社会を考える - 子どもたちをとりまくグローバル時代の課題』(2019年刊行)において分担執筆という形で発表した。

参考文献

前山隆,1997,『異邦に「日本」を祀る ブラジル日系人の宗教とエスニシティ』 御茶の水書房。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計0件)

〔学会発表〕(計1件)

山本晃輔「日系ブラジル人のデカセギはなぜ続くのか - 世代間生活史の分析から - 」『日本教育社会学会第70回大会』2018年

〔図書〕(計1件)

額賀美紗子・芝野淳一・三浦綾希子編『移民から教育と社会を考えるー子どもたちをとりまくグローバル時代の課題』2019年ナカニシヤ出版(分担執筆)

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年：
国内外の別：

取得状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究分担者

研究分担者氏名：

ローマ字氏名：

所属研究機関名：

部局名：

職名：

研究者番号(8桁)：

(2) 研究協力者

研究協力者氏名：

ローマ字氏名：

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。